

漱石『こころ』Kの遺書

Junko Higasa 2015.2.8

夏目漱石作『こころ』のKの遺書にあった『薄志弱行』『もっと早く死ぬべきだのに何故今まで生きていたのだろう』という言葉は、鏡の如く、経済面と精神面で対極に位置する先生の言葉でもある。そして同時に国家と個人の間位置する乃木大将の言葉でもあろう。

薄志弱行。Kは自分の求道を、先生は美しい心を、乃木大将は自分の信念を貫けなかった。そのために作った罪に三人は苦しんだ。「もっと早く」何故死を決断できなかつたか。それは「愛」のためである。

Kは自分を思って生活を支えてくれる先生の「友情」のために生き長らえ、恩ある友に罪を犯させた。

先生は自分が支えなければならない妻への「愛情」のために生き長らえ、愛する妻に淋しさを与えた。

乃木大将は自分を案じてくれる天皇の「敬愛」のために生き長らえ、戦争で多くの若者の命を失った。

それぞれの死を引きとめたのは、それぞれの「こころ」に届いた愛である。しかしその愛を以てしても「こころ」を救うことはできず、三人はそれぞれの歩調で、回避できなかつた罪を抱いて死へ向かう。

貧しさゆえに家族を離れたK、裕福だったが家族を失った先生、家督を背負った乃木大将。それぞれ違う場所で、違う条件のもとに生まれた。それでも同じ「人間」として回避できない「罪」を経験した。Kの遺書は善に伴う「人間の孤独」そのものである。